英乃一蝶

子之巌

12
881
52

早蕨　宇治第四

巻の名は哥と詞とをもて号せるを　これは春はたれにか

見せむ亡人のかたみにつめる峯のさわらひ

薫廿四歳此巻の春なり総角巻は廿三歳の冬

このまゝの春まて　花

哥や詞をもて号なるとにて総角の終にまて

そさわらひ詞なは千よく蕨とよめり薫廿一歳の春より

あるとこと

藪しわかねは春の光を見給ふにつけてもいかてかく

なからへにける月日ならんと夢のやうにのみおほえ給ふ

光を総角の大君うせ給ての年は春中君のこゝろ也

古　日の光やふしわかねは石上ふりにし里に花も咲けり

ゆきうふ時くにもそとひく　春林とうつる也

花鳥の色をも音をもおなし心に起ふしみつゝ

太夫と中居也同也
花なる此色とも言紙も徒ラ揃うの統为へきゝ侍りけれ
此辞ハ心のみとも言理のなる侍や
ちられなる紙も我とも言ゑもとりて心ひろりし心得る紀よろ
うちも侍しきとうちありてひ侍る較常のとしく拙き也
さむかるも有しらおりしきゝるあそまも有るいふとも
古辞にも此上句下句なるといひ出しくゑられしるあまき
ともありしひくくえたくき清濁とも也　花　神楽謡等
末の揃ふ有辞なりとも歩を此上句下句紙にひるゝ侍る
ありとも
なし名人とも言紀まうしたよろ何ゝもゝゝし心ひとつゝゑとへて分
本　守護の侍ときとり
宮のおりしきさ侍ありおりしるあしきゝるもとやおもふるも

てくらひし色ともしむまゆ心うゑせんや何も恋る存くもちもへ侍
まとの本題ゝても　文官の本るときも太君よあたるは一
しおり存しきゝや乃中老の心也
世ふてまうへ人き縁をりきりあるわさありゝれくえなれぬも
何さまりしわさちものもとうゑとし何くをまうりて心あるふる
あおりしまゆ侍らん恋ゝのうもとをたゆとなすくはゝうまゆうの侍り
命とふ袖ハ侍し此むさるゝ勢のは有る言葉とて能り
わらうすゆまはそふ心きもとあるもそれまゆぬ袖そやなや
とハしとろら乃あゝるすをゐんなにし世界にちまとうあとも心
なまゆるひはしくしおりしきゝこそ心まゝて
文字も幡ゝ美ハ今も縁ゝて中居なるその侍り縁ハて侍也　何是釈乃
色ゝゝやうそへのへやうしてゆうゑとうゝもありとてなまゆり
てゝとゝ何しくもそてうくゝはまゝきもゝまし色　出家の

ありけれはまうとたちへも供養したるなりや
とよなちちちて持つて給ふ　一字つゝうきて清くかなれ也
君にとて河まうとの詠をはきうゝのきをとよぬき川顔あり
河宮梨　非君をさまれ年ちかふ毎年まうゝひ清む色さし
ときりされた使所をと思ぬと出家の方の礼様也
御前よろこひ中将しめ給へとおほせ　披露状まゐれたり
たまふにひきうつきありうてうつゝんなと披閲せさせうこの
内々へもいひと哀なく　河宮梨此方をたまうまゐりけて
ようし給へんと中将の兄弟も哀なるなき也
有様さらにわしもおもひさぬなめまとみゆることのあまを
あるの宮本事に志うなにまも読出給ふ事共まゐり給
使くたくこのましき事なりさはくし給へるへの清文より
はちられるめとまうまて涙をこほされはうへりとくうきを給ふ

白妙のころもうち給ふまれとも兄にたるへく云給へり
かまりとも給ひ御めとまりまへく中将の涙こほれけるとみえ
此哥は非ふたりんせむなれ人のつまに使め給ふ所れさまえ給ふ
中将君　又宮も婦君をおもひまさぬは非母の兄君きん
とありけまは御母君のうこれまうひとも也下の心なる
ことを義母もこうせたまふなや
はゝひとよろこひせさせ給ふつとちゝなるまに白ひ披閲く於所
各人のさ御くへの御扣よりにさうちゝ和れやさ給へるつとあ
てりなさめりしきをしむをまさるそて　中将の様を
帝尼なとの見へるめ也
むかし人母も披閲し給へり　大君は中将のかく御給ふとも
なうひ給へりしかときりつゝまゆく所しにふ給へりとも兄に
さうしをとうち思まて八かとうれりと披閲ゆるまてうらひ給

色々紙

是也大君と中君とあらそひ給ひし時に
御法とも思ひおもひしとも一向に姫君にみせ侍らぬ物かれ
るとやおもふハ年ゝ大君と思ふとの人くるなり
中納言殿のこゝろをたのみて見まゐらせ給ひしかと河
さゆふなりきひとつにし給ふめるに　是ハ薫の絵合書
みくく大君に御絵見せ給ひしそれあまりにくゝおもふ比
かゝれやうみくくも見るまゝさなくまゝしくをやの給ひし
洞とて宿りとひきく出るなり
なかし見ハ見まゐり給ひけれせなくさるゝんまと見まゐり
人くさ口なし時　是ハ薫の大君を見まゐり給ひ
くもたのむうせ給ふとも弁尼をたのみて中君の
大君より御絵をも見まゐりてうちなかくおもふなり
その頃あるまれ人のうらひくる給ふなりに皆様ハ年まて侍る

うかし給ひなかとつきせぬ思ひ侍まつ紙ひくいかにしくさ
年ともいかにて
うつくしき薫のあるまれ人の宇治へまゐりかへるに
うつくしき薫の絵かゝる紙中君の宇治給ふとや
薫のかへるか京の人とハ絵合書に此君は宇治なる人の
宿りかとこそうつくしき人とかくしひくまとたる河のうちは
つきみあり薫の御人の宇治へかへりひ給ふに姫宮をの
かくしほかの女房などに書きしかるとやさやうれへ此君
みくくも宇治へまゐりてひとく薫のかへるにとはるゝか
いやふちにまり給へるやもとたまへかくも　薫ハ大君の亡き後歎
て年れ給ともいかにもやみにて給はしまくるるや
きにうちつきの心浅きみは物し給ハかくわけもいとくに聞えぬ
もかくおもひあへ宮さむかしまゐるれいと思ひ侍
うきれ京にわかしきのあんと物し給ひたちまち

早

中元のんや　薫ハ一る白ゆはなく大炎とふひ路ハ作りし
と哀をふくふひ元しるゝやも
あいえんあと初さえりしなはきくして中納言の元心よ河
ま路るゝとを文ちゝれ中ゝハ町てうりんや杉月しきちく芒戸
今の宮乃歩うえに来り行てり元ゆやうれる乞薫たまひん文う
ちあゝめてえゝちゝく楚杉りしまゝ弟るさう丸法くとりき
あゝしつ　　あいえんなと　　禁中に正月の法汁経る
里儒者をめして文あとはくらせ路るゝやも　　内宴
と云つと
心ふあまん　　薫のんや大元乃ゝるゝを白文よあうて
ハ非りすかゝゝんと云ひく来路とも
まいの法むすせあゝむめ丸ゝを紀んゝくあゝ作つ
薫ハ身形よゝうりしきるゝを白文うしやまし色云路て

きとり梅花の白にめて行とも
元の元紀をし杉て来り路ゝる白ひの以てえんり
薫の杉まゝるも
光てたまさを杉りしう杉月しあ　　薫の白ひのめて冬
こゝやの白宮丸ゑも
此路人乃心りかよ元花なまとや色ゆはいてもそ下に白へ際
白文　此梅ハ杉路よ薫り以ゝるゝやもうつゝくこさひと
あれとも色あえ以ゝゆきて下よ白人あとハ文あり乃んとおう
よあまハ法まよ白元ともも下の以と薫ハ哀人のありゝとよ
ゆとりんきて下よはぬと丸むかつ元人とやさあえ元て
よりも白ひのありゝよ梅り以ゝるも以さゝう中ゝ元字治
まゝ路下人さひくらよゝうひ行人ハ類路んも
さの路人も

見る人ありとよめる花の香を心してこそ折るべかりけれ
薫をも薫の梅を見るとて匂宮の色をまさるを
てらしる歌人も両説也しておもしろきよし也匂宮の
御心にて花も紅梅なれは梅を歌よりや下句に大君
をは宮伝へたとひもかくひしと匂宮の心中は中君を
下心ありて中君のやもめやうなる歌とも申たる事を
して宮伝へかたみへさる事のそ也

花 大方かはとくわ前を今まはるらして我見る人の匂とかれ
と薫これ見る人に　中君のうちと打まひよせたる也と
弄 かゝとハらうまうの聞人もまうしけしくしてある人
らきかれとも也と
見るつゝかみをゝすれなりし行るゝとなれ比ならんひ也こ
まかりれぬる御祝とすに有りてハ　薫のんも匂宮の

中君のかたりとゝめもしなきやうにの給へるをあはれにおほしつゝき
たる也
彼山里の御ことを我をまかせよと宮は常にのたまふに中納言をも
もとのやうにこそのつゞみ給はなるを宮のいとまをしらすさらひ
のかたきなきにはつきあはれにあらしともおもしよりた
かくならひかねなりけりにかへやうにてもちしと出給へた
中君を京へわたし給はんとて我ため匂宮よりも薫をよろしくするを
御也
中君の心にて御　大君の御後とも薫の御ありさまの御よし也
ありてこそめつらしうみるやうにたのもしくはくものとへの人は
てさへ袖もみる我をくるにはありて　匂宮ハ好色の人
なれくせとしてあやしとおもふ也とありし人の御こゝろやハ薫の事
のみつくさる也

うらくしき我かりしくひしき語りの空のくしさもまさ
おもひそあはれなりける人の手してうちつけ給ふまゝになりてく
まことうつゝの風のたよりさきまてそめなくいとさしむかひて
白女乃薫のゆるもかたるさとうるやしてかひしき
語とのゝ也
語とのあはれともさしつゝやうとそかやうなれたとへしさなれと
さきの御の園へおやなし梅花のことを見しねやゝ今く待
かきくれ涙さし行人のともあはれにもはかなくせぬ心地からさとえ
ちるをやるとなりそてよもいひつくるはまぬ　灯も消らく
もたえぬもそよひにかくり語らんとのゝ也
まよひめしありけるなりけれむつひ　白女の詞也
薫も大君の方へ出立給ふともたえぬ時は泉なる
ゐとのゝ也

いそかりとゝもさのことはあはれにもいかなる空のいかなる歌あり
とひなし語ふそなことなれ　白女乃詞也薫も大君に
ゆるすなれやうよの語人ともかりしもさや今度に
らしとものことをたかふうさうひなし行也
流んなしひなあらとし　薫乃心も白女の恋ぬらぬ
またんなしひる我をうりなきことひ語とも
さるとなくても物を思して行てなけりしなんのもちともあさう
むさうとうけるをなくさめまさに哀をもさましかきりくに
てくしひ語　薫の心也白女を物を思して語人すて薫の
物らひの胸中をもさまつくるなる語まさしひ語とゆ
けんさ母のかくしきにもうされなりてきにいまはあはるさて
らひむをゆくるともさうしてかなうやすし語るさうれく
むもの心さかくゆちし語女とものんちうくやうしやのしとん

ともる所のみなうてしひやりし行を　薫の人〳〵も匂宮
の御ゆんの為給ふる横川に薫のもてされて御身のこめ給
たまもあまりなるもれふものとまうしかなり給り薫
の胸にさりとひとり行るうちはくかやや
いとうましきるふも給ふ所　薫の詞も中君を京
へわたしましをと匂宮の給をうましきとも
おひなくみつしれ行ややまうちとあんそ給ふへく候
薫の詞も匂宮の中君にうちとらくしく行りしまうし
時に来皆公る事のみ出し中君に庭中君に対してて
恋なく承わやまうちとみふとも又大君をさやうり給
をひ給しとも
行りなむしの御給を文字りおへ給うても侍りねえ大君に
是行るるは浮きてもうつを中ゆへ給へとあんそひ給へ候

薫の詞も大君の御給ふ浮文ととおけるを中君をと行
つりひすさんとふとも
よしみんなくや御けしめさ給ひふ候とて
ひたあまみんるくと読へし中君をおけりひすんを　薫の詞も
白ゑめのよしひんるれ事とやおけりめさんとも
うのおとくとふともひまれそやゆつり給しんなきてなとを
しためふとゆのし給へと　彼と大君のるもも中君とた
承とみるておつひなれとゆつり給しよしと給り
給ふも薫の詞
いもやれまりとのふみとるめへ承りしよのるりへのとしおりけを
伊勢又 奥へ 海を
ありくいふてもみようし人侍ふりてせの杖のふみて給も
白ゑ給り薫の大君の事ぬとさんくるを給へとも中君
よ一枚おひ給しるをとへくるも給りのへらてせの森れな

かこちかほなるその義也是は人傳ならて直にあひ
語らひたきとの森のかこちかほにやとれんやさの
詞をまつ紙一条禅閤の歌作るに人傳ならていふ
心なりかこちかほやと答語るしやされしたるのへ
人傳ならてきこえまほしのみや
河方 禅閣梅のうちせれ杜のかこちかほなる我思ふさま
業平歌の柏とれ心よりかくいはるゝ　薫大将り
あはれなのけしきをゆるしつるまゝ我心によりて
をれらもさくしもと見合ぬるものゝしたうとゐんや
是 そのゆるし成立にかゝめて有人さとるゝ
いかなれ枝のかこちかほなる尋たるかひ有の古事ら
得ぬと見をとりていかつ心も見てもみより
の斎大夫柏木直古を言しや人傳ならてせれ杜のかふ

こゝろをも人傳ならていとうる心也又かのその森といふ
かくれ杜とうけ取源氏の一部有とて
わ 人傳ならて物いひけるや　中君は薫の二夜契語
しるぬまさきのをとつり来てくれきてをみよし
此方のと人傳ならて物いひけるやとて一條よりつけるめへ
さりしやうけるは人傳ならてと云也とて
心のうちはなくさめてかれかみ見ぬとをふきてくれ
かやうにもあれひかりのへうされとゝやしさとやうくま
さるとゆきをや今いふひたれ物の人はゝまうれを思ひて
薫の人やあかくさみてかゝしやなん人ふみよみかれ
見をりおりまたは中君の心ゆかり語し　また簡目みて行
はかりやしとひ給へかくやしさんの憾みとや白き紙ぐへ
まさし語らんとの語に付くるや

あるまじきものとてかぞへぬることもはべらざるにや
ことわりなりとぞいひならはせる　薫の君も中君をわが物とおもひ
せぬるよしを書にかきしかど人々にはみゆるともの思ひ給
なることもなしとはいへど人々にはゞかりて路とや
はかなきこともありしかどまことにうしろめたし
んかくは又えさらぬと御心をかけわたりける御心もちをも
せざる路
　薫の君は中君を宮人に遣ひて後にこそひかし路とや
かのてハ路をいかにせんとおもひけり路とや
うちにまじはりて人の心をおもひとりて人々に心ひかるゝ
まつるをもひきとゞめて　うき　宇治のゆふべのかなし
路となくさめけるも
今はとてこの君をもかしこくそんぢしうらみ給ふぞ
そなたは身にとつきせぬ　中君のかなしや

うきふね
いさゝかにもうきをハ色あんなや菅原や伏見の里はうきなくとも
宇治山の伏見といふ所の楠にのや見わたしの里のなにはの
あるゝ人の伏見とそれはさてハつゆのあまん
ありしこともあるまじく此なきことの色ありとも今もかはりなき
里　河　伏見は大和国添下郡云安康天皇崩菅原伏見
野中陵葬とこそ
菅原や伏見の里は八重こゝろの人の跡ハ絶ゆる
ゆふべにもえまゐりてかくのごとく伏見といふ宇治と伏
見と云所かわるものや此歌云八大和国菅原伏見や
このほかのみちやこれともかく菅原院と伏見とを
云やうに　花と葉に宇治の名あらはせんとすくる
て此伏見とふかさ
無流の引寄に同時之弄　いさゝかにもとひとり方也

と申しあさましきことと云りされは後の心をとしけ
てき云れぬとこそこの里の名もあけうかりけるもとくく
ありくてと又せめてんころくそとしくよひをともとも
中将の心也云かて云やうらくれぬ也
夜をうち明ましを流ましき也　さやうにてもとくれりし此道
行さうて我中の契ともすくもとめへてよふくとふくれ契
しみさうゆゑとのこ極楽のし給ふともくしそてことわりなきも
いうくもなくむと思ふくれ給へり
のく給ふるもと云りふくに中将に出家させくる白としもし
流へはさひくしよろ流出有まし名れて流つく我契も絶
ぬへきと流は流れも成るなるゆゑ中将は何ともしめし
て京へかへり給ふんなるとさとうくの給ふとれんもきぬそ
中将もともくしは白玉か何ぞと云ひ給へそれといはゞ

うへやんやと云ひこされ給ふとも
さはしきろはへたちこゝろと行まて侍るとちくあかりまゝ
つまとしとのきしなさむとものこゝろと好きし也
中将のかりの時なる也
顔の露をあかつきと見もそてんなるもとのくこゝ世にゆくあやふき
ぬたひとよみくふかきしきれくふかきしかれあるこゝろとしこそあ
とよかはに流くすまし也んひとつふかきはに行くくしし給ふ
中将の心也後の心をと云ふ主なるし行ふ露にもあれは
鬼をかんにて行くを理也露は有りてものと云へるなり後へい
そこくみんとてことゆゑとの心やつりく世のきと
えまつ白玉ぞ京なれともまとの宮は焼てそとは白玉
へうつり給へ人をのくことに云ふくなかふあかしめくとはつる也
古注
まと露あをつとうと見む待くのか後は花なれ里に行やあかくる

河 常世(トコヨ) 白氏文 蓬莱山(トコヨノヤマ) 同じ
花 とこよとは仙人のすむ所をいふ也
優婆塞(ワハソク)宮の君の京紀中をたちし所をいふ也とぞ
弄 春霞たつを見すてゝゆくかりは花なき山里に
て旅の空なるかりがねも中空に都の方へ住馴し人
なれどもこゝろよりうき事を焼ていづく成所の方をいふ也
いつくともさるまじきあはれ事をもみえぬなりとて行つた
花 女君の服は三月の事也
陰陽師(オンヤウジ) 陰陽師とは占文を仕る者の家をすてて神事を勤する也
みちこそとはあはれにもおもちそすれ　陰陽師のよし人の事也 河
おもう河原といふ所に人々出給ひて祓ともいふ義式なりとし
給ふ人しかのわかれとて服をぬきもしるしに祓あ
さきまへの給ふをいひて河原にて祓をもすなる

えうき 河 除服する也 河原にて解除をする也 あはれなる
事の服三月のうちに給ふ其服をぬぎとて行人なる心は
八丈母のことくになきやと思ひて有河原にて給ふる
也と云々
花 母の服は三ヶ月也 みやこもあはれなるは軽服なるを云
ふつきを除服の時は河原にて祓をする為り門のあ
さきにせよと云々
わかひとあるなれは御しるしのこともとてもみえぬ事を
そのゆゑなるいはひのさる常なくそめんとの給ふ
おほいの給へと 中君は母上なくて給ふなる時なれ
ある一両にきえぬとも思ひなきものといひなし給ふ
えうのありしる服は給ふきみこの也
ゆくへのれなる人をゆ人ともなれさまれをかへりとをかさ

るかなとなり　是まれ脈ハ心をかけまうせ給へまれ

左大臣より是脈と兄しなまとものくさとられぬ

とのんやさまた中のえたのかなしさとや

中納言ハ夜より御車渡せん人のへくそうすなりとさとめ給へ

まと　是ハ隣脈のたくへの人めふ薫よりさ御車あとまう

やられしや河原へ渡殿り出給へきそともぬへし年中治

川ちくけさえたるとやくもし人給へしまうやとなき力

也女房ともまる給給へりおかしも内匂宮家へむらし給

時源氏よりはつかさるしやまま給りや

ちかれしや家の夜年をうしまと花のひともくちりさき給り

薫中将家の夜とハ脈夜のうるや是の夜とたちへ也脈

夜とさたちてさ給しと渡り人のやうなれまうや隣脈

の物よ奴るまとれ給や花のひもとくやハ常林紫来

ままいへ女給ちんとしとまうし一統り出家ハ中将の宮と

云りさ時ハ花のひもとくや上のえ隣脈とよろこひ給や

うれ出てゆきた上は云出させる兄出へきてふとられ待てと渡き

なくもへは女上は又隣脈の時女ともうしとつるへしり

見るへきまる也おりくハ薫中将とえたくす給也時統

也又古き良僧都よ僧正遍照卿れ詞書あも源家は内

の時よ死人たすくまれえりたす道ほうまうりを

家とと逢ふ事よ奴よまれたちしみ世にと出しさし

なうのなりのなりてうしこと花ろう毎年うたさもの

しさ人のるくめうさてある心うり給ひける上とめひ

あるは出てくめる事人をたの夜よ奴ぬや古の絵よか

まだそれたやよ是も脈夜とめきてとまれ紫来り給

らさせる女花の夜りあるととふるけや

もろこしのことをうかゝはすといへり　装束のさうしにも
此事ありとあるや宇治の人の心よりをこるとかきしを業平
事とみえしあるにや
清和天皇の御時にありて先帝をはなれてこゝろをうしなひ給ふ
事なくて文徳天皇の世となりて後清和の御後をはしめてはえなき
後なる　中将京へかへりて後ゆくへもしらすさりし人をまねき
ことまつて業平とよもせられしことなりや
清和天皇の御時にて　業平の事よりこれをあはれなるこゝろを
かへり
そのかみのことをとしつきをまてそこにあはれなるさそひたると
人とはかくしてふかき　中将の兄弟やすもりとも業平
従五位あはしとへのうえや
行きやうあるに行平の朝臣もその心にて後にある後かれ心をはしめて

かゝり
あらやうあるをはむかし女の後とさうかあかりしかへ
世勢のうへにまてはなれてさうこそはよくはかれしうちあすてや
かゝり
かくてまへ人の心をしつくゝとみえまりあるかくて今とことたえ
まありはくとてかくしむかしのかへりしかはしさゝや後
ありとかのしあへり　中将京へかへりては後あて業平とは宮
是又は清和の時はまゝすれと時くとえみたまふうちまゝうこと
好色の心より業平とあひしく中将の心あきとこそ今ほさんそ
やあへるとや又業平の中将とあひしを行かりさんとも
かゝりき
さつうきてよきをと後さんなり　業平のことやかくすの後は
むとは中将の京へ行きて此出くいふおれ日の御時よ守
清へ入とくり後也中将は二月七日に白河へしとゝきと後業平

此言は治定したるかくに治定と也
あとさきのまことはしめてたのしきなれど　ゆるといふか
の日みまくほしき業平の心也といへるも也
是はのまうくやうのうらにあけくれつきても
常に此家の庭也
とハやうく物たえてまことにふへるまことをまちまつやうにけむと
さひそめし郷と　業平の心也とハ　さや断たてし所
色氏の家の庭に而ちよさなれはあのむかしの心也　大后の
物のまことにハやりぬるを汚くしの心也　我かそへりんとき
なとハ業平も中将と申さまに大后を京へいれさん
とおもひそめし物とこの心也
有りし様のふかくへとそひ出て　大后の御伴に之の
給ひけるにも業平の忍び給ひし也

さはりふりきちかれてよのほうにあらんかとしてまみゆる給ふ
なりしと　業平の心也　大后の我はおもふことく家に帰り
ハかへりしくと丈にけるかなさるをみれまてもしと也
我かとそあやしくまでおもふすまいこれとも思ひつくと云ひ
つき給　業平もいまのかにともとてけむひ行きもさく
そ有へきとをうくに涙ながしてなき給ふ也
うらみこゝやかしけれはおもしろくそのひてらるにまかりて大后へ
ところなるかなは物かへしあるへかしとうなすしらるとも
くとひいて中のうちへのうちのとにけり　おほ大后を
懐子のあふるとのそかしまゐらせ業平の物まへ
めて給也
中将ハまつしにかまゐらせて　業平の取り中将ときも
ながされたかの事也

浅茅の門より行かひもとゝめ給ひし所に御覧して
てなつかしう思ひつるに　おなしものゝよりとい白き扇へ
しらせ給ひしとよりは今の御つとめしさに侍り門と
まいりさま殊なきてはてしかとも行り
とれんや殊なり侍めるの御也
月比のはかなきを
の殊なり　　萩の御也こゝへ来りこゝの夜は
そこもとにおはしまさでは又こそ思ふらめと
萩の御也おもしろきに見られとものやうにさしまか
ら給へる心ちもとなりにしとや
かくしとおもしろきおもしろくさめ侍りしや
ちかひくへのこひと中宮の御てなくさまんとや
きいのもしきまれくおもしろく思ひて侍りて
萩の

御也ちかひのこゝにおはしまさう給ひてともまされ
ちかひとなるや
いとゞあはれなるに侍りしさしも御給へるに　うきを
世におもひしんともあはれなるをさりそありて
侍りてよくこのんや
そしおもしろきとうまれ侍る今しとこのとさやかにと
きいのやさしきとおもしろしとさそらつらいそらかくし
くぬ給ひてもやと持まうておもしろくまた御は
しかされと　　中宮の御心なりや
いと侍りおもひとこれの御心して中宮さしのこと侍り給ひ
めんし給へり　　萩の御給ひとものとへのやとい
と侍りしきさ入萩とこそ
いとゝおもひしきにおもしろくさまのひと侍りおもひ侍り

よなかさとめもおもひくまて宿ひ給ひぬへきもこなし
いかにとはれぬて家の人やとのこゝろへく給ふる時　薫君詞也云
昨夜は物すりけさしぬへのけしきとさへ云ひて宮へ給りなと
けふまたみまゐり給はさりし御消息也も　中君の事也
大君の事との給ふこと薫を見るにつきても云出給ふと也中君の心
也西都さへぬとかくる大君の事をさらにつゝまぬ也はれて大君
めるなり
今はとかくもてなしやすくもひさして
けさとは宇治へまかり給へんはさのこゝろすらもかけしと也　薫の詞也中君
おもしろく給へるにこゝろをもしてうつりかほりをかくしつゝありて薫を
薫の詞也二条院へ中君わたくしや給ふへきにくしくして薫を
花
三条院へまかりまかりなんするれにあひさちなくらんと也
中君のわたり給へる所は二条院也薫は三条宮にはへる

弄
出てこもりと行人こゝゆへに程なくまゐりきゝやと云也とも
二条院と薫の三条宮絶えて給ひんはかなくちかく程
なしとも
秋中暁とはさくしきへの心ひ給る光源氏かつと女の物思も
うとうしもおもかけの給ひをはしめ給へんとてまことはゆめしきせう
きこえ給ひても思ひくさまりしうなん侍るほ　以詞書事
せられ云詞也待事たきそもしたる人をかね詞也その
はきくしくふとひとつをとそのわかにや行なれもかうもとの
人も幸とをおもる人のれもかやうれとするとものなへときみ
薫の詞也　弄　秋中暁といふもかへしたる人をいひぬと
みやらと
いつかはしかもえん人のんさあへくよ侍る世なまてはかへかな
ならやかとひとつにもえくさき思ひ侍らし袖とゆめし行人を

廿七

薫の詞也あはしとやうにとさへともへの心をはかりかねつら
物まれも中君ハ行とうき給はんとひとへに思ふやさ
めとの心はかりひや又いかやうの御も有まし御架なれりとも
ことはりんかとの心をともさり
やとなとハいまつやそ思むかく行かぬちかく宿との給ひけるに
はけなけれよ給はまみて是行かて宿しさをゆる人こともも
なくなれしなくいひなちていみしく物なきと思ふ給へるけ
もひなりと　中君の詞也我ゝ任せ給ふとも薫君
宿とハかくしと思ふに二条院わたりちかけましとうんとの給ハ
中々ハ住たくくハ御給ましきこともやそ是ならひる也にとく
薫とほのめ給んや
右
と思し召しく我しき物をへまゝん里とハかれもさそへ行り
行
此中の宿とハいまていかう行かうもの又詞すもさへきやと

む
花の香はさとを思えてよも宿とりれしし覚ゆしさえ
弁
引歌中君羽或本里とともやん同宿とハかりはれさんと
や思物なちらくなとの給ハすをとてかうむかしやもと
いとよう給ふ宿つるを
給ふや　薫のんや大君の中君給
中今する歌の御すえ又なりにはるまやえそへたてしくやしきをひめ
行へきとうひかけまは　中君と大君の歌よゆかり行へ
る年の秋の思ひの宿なよあかりきとなりまさくやしきとも
それなうるかけても心かはれ　薫の也や中君に一夜ゆかひ
たりしるをとうかそめあるとの給ひ出ぬとや
ことりあ給ふやとみゆるかりまでけるやうにまてるし行り
薫の也也行くらかす夜のるすもいらせきやうもれるけり
すれを行くハまするやもこ給ひと中君の御神目なし行き也

早

きさらきやよひハなくさもその中への花ぬき庭とらつゝ又一
條の東なりしといふ宮に住し侍りける人は大后の中宮
と業平はゆつり語し世にける比ろさそめけりも心ませな
との語ひ出ぬともあらぬるすらもゆかしきこと
けれともらちくらゐのさともまた出つしましに宮をきさきを
くらゐにすゝゆくやうなりけれはまして　宮さたに
其の宮に宮るたよみもくしろもあるとやうにといふ月
あらく中宮も此宮の元ゐあるん見えしたり
まやむかしのともさとらし語まことの山ゆかる春にれむかし
ありし風のさし吹けるに　業平此一条后りあひ
て後のすにらて身とよく物思ひとのころよりつゝ
古 業平
月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身ひとつはもとの身にして
花の春もまつかへのの色白ひも橘あらしねともむかしと思ふ

冬はうるさ　橘あらし梅と　むかしを思ひ出す我く涙
まなかりやなりましらそく其に若ハるすやむかし梅の
きたそちらそれあらしねとくなりしりしといゝれんあめに
いつるあるへし　橘ハ端なりまあひくなりといふ也
業平
よしなり　端こと
古
さ月まつ花橘の香をかけはむかしの人の袖の香そする
はきらく我ましりしあともせうしれなくさめるも心とし絶
てしらぬ所らひ語ひし物思あと心にあまり語へし
中元のあんや大への此梅をうへ此所もさりしこおりもん
とくめてまてあらひてなくさとおもひし物とと思り
所あるとやさまは家をと中元の立ちるあまんへしと梅
まさ君也
見る人もけしに海さ山里ハ若おはゆる花のまそさ候

中々見るへきもなきといへるハ京へかへりてハ猶みん
ことはかり風をおもしやとりもあるしある也花も猶ゆか
とハ花のちるをはおしミ花なくと出給ふや又みる人もなき
しかるに見るハなき花なり梅さくらも自然との心ともいへる
弁
家居のまへに出る心もあり又はや見るへきなりと
中の也とそ
いそかるゝほのかなるさとしくも去らしかねるつらし
きにうちなるしきりし　宗砌
中のての花のもてしきにさんしかし　中見の寿と思のうち
袖の香もうし梅はうすくもそめそかへる袖にあかいろに花やとゝなる
薫る袖かはしとハ大見なとのかつやねさめてうつろふ
とハ本を猶なつかしくつるや中見の京へかへる
ひ給ふと梅にたとへてみるや宿やとゝなるを八所のか

のこる宿のにほひもとなり
河野肖柏
弁
過しにおくれ花をみるよりハ猶とめに風の後もこそあらん
中見をと帰見のくるしみとよめる花袖かなしとハかりみの
夜の心ともあるにや花をさそ行よ袖のうへに残る花とそ
猶とめハ猶なくる也中見の京へかへり給ふかんなるや本を
猶なつかしとも也とそ
さそしぬ風をまちまてしきのにほひにして忘とおほくもあらは
まつる心やさくなるかくにとも中すなさなるへくさなきと
中すらさとさてたち給ぬ　薫の物さや
猶かくさにあるへきなるともへくよの給ひともこれやと
またにうのひきうちれ夜半へ中とさこち中ゆへかれとさと
なかれちりかなけりとも　中見の京へかへれるを薫
の給へるよの給ふとくや

そのうちその程あつきを中とまめやかなるかたをもとめさへはさため
なき程に弁そゑやられなとまうしゝをひかへたまへ命ひと
はしくおほしめしゝを　このたひは御ゆるしに堪忍ひと
まそて菩薩の清浄のくめしての結縁得や
人もゆるしをうけ思へ入れなとも世にはかりなきも人まいる
ましや
弁尼もせしもして大臣殿もとくも又今からもと
もとへされは中宮の御方へかゝる結縁侍るなとはいはん
まくしもれなは此方を斟酌しあるへしや弁尼ハ御返事
さけ尼めて大臣はとくもこそのちの事とそのたまふや
うちとけもかくてみな申候
てまゐるや一統させわさともみせよと　弁　弁尼の文うにをとれかし
さりてめしうて御使とる結縁の其のむかしかならともと
てさきを行てうへにも頼みとるよくもたのまんまいるへきを申いはん

たくみ御そうく人さるを　弁尼斟酌もうけ給あそ右
出ても也
あくてその中しはらん色いと哀なり給ひる人をてたち
ひ弁とえんを色ひやしきもろき結ゑ　弁尼ハ御返り
とくまうへさるか菩薩の結縁やうましうるへきとハ菩
ゆへ頼へ付くまいるを給え人も弁尼かいつしんとるを給り
ましかのとも
ひとかたへくのひ侍の命乃便りく　弁尼ハ御也哀乃のこ
てもたれ候也
あくさのこまとも田丸池の称名号たいとまつる経る法のりそ結
（経様）おやしくもいとふまえゆる仏の御心のふしてうれおりひやむへき
まつりのにせよとてうちもてさを行ひたんとりしあしく
大臣の弁尼もとうち称るくさんまを結るのとあり

ちかくの世迄も人のくちつむしは是とりふるく作らんと
出けることにとり出ぬ事もゆるしとりくもりあれと
（拾遺）大すれ哉あひとつのうちよりにあらぬ世とも恨つらの袖
いとふかく思ひあまくさめ給ふつゝ袖ひつゝれと蕙ちりのもとや
あれなるなをそふ文をもてられた　　蕙の弁尼をあくさむ也
（弁）むかしの昔とのちりつまるにもとしりつくありて
さけわきの時よのちつかりて見しつゝあとれるをもやとに
のりのにやもりやおりひとひくハ　　弁尼とつゝるを
それとも風流はしくしなとの蕙のもの也
（河）閑窓　文窮（ヨウテウトミヤヒカく）文選　文閑（ミヤビカ）　白氏文集　文腮脂（ミヤビカく）　遊仙窟
あとつ成りさみとあるしきまつさるとさんを見にのつるやう
とや作しましのつくといひにむあつくかつしひ出てそわら
ましあとひとつゝあつゝとも相見し給は　　蕙のものやえを

名やうに尼はあらしつゝ今此のかうるうちと有やさんとも
このくさんへうつやまりしゝれハつくろくたつる几帳をとをくしむかよ
やりてこうやりにそかさしひ給ひまたむけよもひ滑きたる
さ傷あつしつものうちもひさ給さしなますいくちわしうつ
をゆく有々のくの前とやとと見へしき侍り
見給へく大えもと居りあしたくハせあつさまつと給へん　　弁尼の作とを
と蕙のくやしきを聞也
さえりま川波の川よ前後あけハ人よとくまあ今ありまし
弁尼ある大えのさきもら給付の前波の川よあひとあき
さしゝハ大えよけの今ハさとくましましてきとも也
とうちひそこ出のつされとしてはとあつくあつてとにて
蕙の帳也弁尼のあまをあつゝん物とともにつ見あるかなを
ましとも

うちさしにて我はすみかくのさしを行ふましきなるなさん
かくのさうらんに於川をもくさんを行ひ給ふへし
此頃よりくふおもへにて物やいさうさう給ふてくまや弁
尼身をとまけて後彼岸よりあらずや申とかなりんと
行ふめてきん人此今彼のろうに於川をもくさんハあちこさ
なれたるかと云ん也河内并子孫のさしにてそうるかハ行
来りさしてをわるまじきうて事にれかうにまへてをを
兄きさんをあいあまじと行ふ者ハよく出候にたるにや彼
岸行て給と云るかハ行まてともを身をとまけ申てもう
人ちうくなりにおもなれたさしをわるまじうと云彼
岸より行るハ行ふましくかくとのんや云遣行身をもあを
むことハ云ふくのんや
をへくあへてくむまさしをと云ひさうへきぞ云にあなん并との給

世上ハ行ふかと空やと親もへさるかと薫のへ給ふり
よくくみおやせまとの縁やをへてくとハ畢竟とのんや
身代あけむ深の川より云ってを遂しさせたに云わりせし
薫屋もとひ深の河よ身とハ云ひめてをを遂しさる
云を頃あそくを云しとの縁や
差拾 おもく川をとれをくりと縁ってく遂しさせたにかれをは
弁 むなしくとの給ふくを様云ふくまこのなん切まてま
まらうにたんれ如へしくく
いうのくん世よもとしを云ひなすくさむしてく有さんなて
をまかに四ちし給ようへんへうとをあすくあのしまてむ
をうれまうれともくるうよ辛ともひせんと
物や不深るまてをあらけ云らふれる世あうもしとせん
人のさうむしろるかやとおうへるれたうてとり給ひぬ 薫の

紀氏この名所をいひて侍りし折から白雲れうかう
ひろきんと御詠也
松すりしの影ぞうたゝまよそくちをて弁ハいとあすくさかうく
く事さとひたりも　弁尼か菓のく路しよくうへ我中
君りたうるとやや
これへきんゆかしうかくさ見くわめへてあかうて為ひ
ゆかあるかさらうとうしくにはくるひさまかふに
弁尼かこ也んゆきたるとくいんのあすくさむらや起らう
とおうんと中君乃家へ見りり路りん内侍の用ぞ也
いよく座州して　弁尼か詠也大君の多れとたまはく
とよ服衣をとこさくれんや
へるみるいそぶくしうあつ袖のうらにひとりとしかとたく　おまかり
弁尼あへくハ中君の内侍とて袖あるとうすらつさらて

いとけとなりしまはく大君のるいのあとをいひ出るく袖の志ぶ
うるくとさう尼なれハ海まよりせてみるや袖乃浦
名所也
摂津 周防
唐衣袖しの浦わうはを見しかすが定まる年のとふわらん
とうまへ雲ゆまはは
志かたるくいうき衣をとしとあまへやう乱ころ波にぬるくも袖
中君あそこしたまひやとハ弁尼か志かくるく袖りまれと
かうぬとのんやう乱ころ波とハ中君家へまゐるると路
てと肯つさ行うんまるとも志り路りのさう乱たるまくへ
さるやそ進をといひくぬるく袖とも弁尼か志かくるく同
しからや　弄志とたまひやとハ弁尼か袖ふともおとうう
を同しすとやらく
よみすくはうむるまといてと肯かさうる人へさりさとお同ゆま

はなはなかきてうひくくさくいとそれ所迄ありてしとちんだうかと
中将の姫や京よりくらり給ふくと第一おりつゝあるまま
やかんとの用心は宇治のさやとしあるさしとや
さらは新田と有けへ入れと　中将もし又京よりさ守
給へくらり給ふに行きて弁尼ともし又あひ給ふんと
の給や中将の姫
しかしれはとも心得さくくとまうり給ふとかへそくにつくく
むとゆりもなん　中将の姫やさとさいふ家へ立御
乃ハそくしおくとも何まゐんかくて又行きうくて弁尼を
とくめなくと見給へて行心ともなれとや
うち給ふらなんへとりなしとむかうつしと左へまう
ぬらさきあやなしなとの時はまひなして時くさと見
え給へ高とくいしなつしかるしもひ給ふ　中将の

姫や弁の尼のそくられ給ふや一向に尼ありて居とそてと
蔵てさくらとゆひなあかれたきれきの仏はよさひおうし
て所くは京へとのかり給へとのゆや
むらしれ人のとてはつひ給ふしのうへなは初めそてともなとハ
みなひ人ありとあひとくれ給ふく　大将の姫君とともとそえ
弁尼ありてさひ給ふとや
かくへするをあくさきつく給ふるたくされハきれのよもとさり
さうなたる数りやまめし給ふんとさつさん出つまりしく数
はなうんやとの給ふに　中将の姫やあまさ何る中に丸
なくく弁尼乃大将のうすと歌行へ出生乃英西やた
出つまりしく数あるとや
わまくさらへのそのくなくやさしに心得さめんとすくお
はくさいやうさ皆つまさそくひょ給へつらうまてめて出草

ともよみてうせんのへく四位五位のと哉はらも
弁尼のうちも候さうなるの親王く更にまくや
うにも中宮の宣旨どもの大輔もとちかりぬへし
清みうくともつかへしうけりしはさはれもとく
しまありてなくうくはしうる人々はれ共まく申ひあるは
にまそそありて人くまらせきて候はさる中納言の殿よりもと給
おろへものも御はらく書送給へり御かりてきれるとしとて立よ
つまいわ給はせさつあれさやうれあらは御かうのひはおくこの
殿よりとひよりぬるのなくとこひ宮の御日もしとむし
とうらあるとしもあうり出ゆえに　白ゆえあとり
方は送りのさせ給へられしもおとくしまてな
伊うさんとあうら申は心ととと候もとや
心伊えくとし　中宮の宣旨

さらなくんといてとちうれるうなしやのと尋ね給ひに
清車よのおはなはうさよやいふへの子
中宮の御よ我方は何とらなんとや
あるとわれは嫁しさせ候とは御あるは方もおのすなけてまいらせ
大輔君に　大宮の歌の御方よとあはせへとれうまい
しきさやあはあなましきとのとや
云
初て年の秋やたる御波川をまゐらせにあられはせやと
左勝
しかえに給ひりなん淀川が時きせかとなうれあやと
弁
うく暮せしと宵あの納とさまりあをてあきなうたつら
弁
初つくあのとまて給のさうぬ心あうへし
うら思ときるを弁の何うれ心さへにとうなうと宵の鈴
とひつきるよ夫の御子　中宮の人ともも大輔まちやうに客
をき残くうら思くなるとみなしく弁尼は大宮の歌は

時かしとかけぬるをとつやしきやしにかくるに大納言も
あとかをとめぬるをとまりしきやしに人ハ事みちくひさら
まとんはかなく云給ふとも
とひとなき　又事よめる人ハさ斎なる人し
まふしつ逢しみるいしとよれともつてさしもゆくころ那
大納言のうつしとよる事ハかくれともいはも京へのか
ねまそれをとなくさむるとやうさハ将てにをとみや
よう達とそしなさる人くみえ侍の御ねをそえころよるか
あまし手まりしとよまはかくいふひあらしなかてとつとをるを
かりのきやとおほし給へそそのもいふまゝ給つるそみちかほ
のらけくるそしきよ山居の宵給をとふよう我
中納言のんや山居人ならハ右大臣ハ也をとまかせつし
人ともあれとまね京へハはろひぬるようしひつかへ

御らでめて大納言のうらさ也つ月くしてかくてしゝハ
ミしてつらねともつて此世やと物との給ふとや
はしるえりのことゝひなさまつて人ハ大事のうちひとをとて
つそのすまゝあつらうとも也しく君はしきまかり七日
此月のさやかにいはのあかりも物つてをすうはあるひまハ
はくいとそるとおもにあをしてにはるにうれるうちのあかつ
まそて　白河のあらうと縁と中納言のまふ京へのかたを
給居をそうしまりしあまし山を越給まてにとうりのさ絶と
云ひしわとはとや
あなむきたは山くるを出くゆく宿を君にまさ縁くし山をこえ達
中納言はくくと月をと見給りし山よりも出くて又山より
入給ハ月をしうさ女ハ経俊くさやうかるうとや中納言
とるよてそ那への方よるとしもまし又経俊事あてこ

のゝ里へ立帰らんやゆかんと泣しつみ給ひけり月よ
みをはかり見あけてなけき給ふ
ちゝ上のおほせにはまことにおやのおやこゝろゆかりて
しらせ給へり　中むかしのことは月をもせよ山へ入りて我は山
しらせ給ふときよりことをはかりてやまに白さわの
心かはらんとおもへはやさしきことに給ふ
弁　あはれ山里をこゝろさしなから
弁けふはとかくてかへらんとおもふほとに
ちかくたちそへたりけるはおとゝのおかたのみまいらせ
やうにもなき夜はなくはの
弁はいまはとて思ひはかりしとのゝやかてひかへ候へし　白宮りあひまいらせ候の
しまいらせはかれはとて心にまかせて候　すきとも
こゝろにてはまことに宮の御かたへまいらせ候

しられぬ涙車にのりて[illegible]にて
なかれける人のあるへきやうもなくて女房たち
まゐらせけるをかたはらにみえて[illegible]
けふはまつり
古　こゝろ夜はもとよりけり　夜もなくはかりなき
うらみにまかせて涙のかはにまかせて
まち給ふへき御ことをもたのみてたのむかと　せん
とこゝろにてまいらせしかはなかりて中納言は三條の宮に
かたはら月にまいらせ給ひて
の人まいらせてのちまいりて　白宮は一段なき
まゐりた鏡りこゝろはよそに見ゆるにまかせて
ゆめしとせよかの心にまかせておもふに
こゝろはさりとてあはれなるをとこのまことに　夜は三条宮御方

此歌の時分ハ日ノ入をいふに行とも也
ひかんのなか日とあれハ春とも秋とも云へきにて侍るまて
て侍るにけるにや春のならひへんのくれをとまりく
有様をとかくいふそ心也　これハ二条院ハ三条家の
うちの事也
いつしか河心はつかしうちそての花をいさきをとも河
なかしきはなうしたいかにわいの事ハ行とうちし也
むかしよりはなまて　白妙中光を心はつれ侍れとかいふ也
物すとしれやとてくひとうちへなまて　万葉のよし也
とうくは物ことに郷や世中とありかし此ほうかと云人
ありてあるやあれハとおもくつ舟のはなやねともあひてかと
万葉ニ　色ハ岸ニ南やさされて物とハちゝか湖ニ好みの惣名
と河海をとかたしたりけるてるとつくるも同てなりやもし

て浦とハ塩海の惣名と云り仙覚抄ニハ滋賀をいうきちてにいへるも
云りまかるしねとも也ハ西行法師の万葉とかりしかとも中
見よ一夜河ひとうまて我云りてく舟れ抗とつくまうる也
此歌万葉ハ歌不下白心さくかゝまうと絶物語ハ
毎とめけも伊河海まくいつしかるる略之
河内ハ
志れてるやあれハ湖まてく舟風まわれも妹まに行ひそてハ
此哥大略同物や物まかまの読すいひく万葉の哥
とかきくは強浪羅とく武又伊勢物語あとも遠しめて
すむやうまたく万葉の哥あまさ行わさう山の哥
にかやる物語ハと八所ゐかまのるかる蜂思にに
勅撰ま中古まても清性寺関白くに湖をうきれうしさ
ひくの硯し後徳大寺左大臣なりし乃橋ときてみ連
またとうまれたりしられてるけれ海の惣名也あかてる

同白氏文集に潮気と云りさるを氣ふかきにまて
てるやうに河をハ川ともよめるをもて海ハ塩海也或又
難波かたをも難波堀江をもしてさるやうなやうに
弄
万葉集にもしかうをたりる細見河海てるやうに云はる
志賀てるやをよめる也あかて海とうなや片岡山のなかりて
世にはかなる人しき風ハ吹れひてるかくて田山とさり夕日
あとのかくふきてるんや
とおらひくさまはしおなのおほとのかに六条院を宮に
なりにけんかす　一夜わひさるうちと菜のかひかれとや
二の月とおほしけさめたりあるに　白氏文に六条院とい
らせんるよを二月の中ばと待さめ給とや
かくやひのわかれ人を　中君のこととどこう
このほとするさされかとおほしうちたうし津をよそと給ひて

さるうれおもしきれとも　六条むかしの御ありさまともおぼさく
中君紙むかしの給とやさされもおもしきれハ中にも禁中をも
六条院をともさされ二条院たるをにおりしまほとや
いと物しきにおほしたりやうち給ふもいとおもしくれと
夕霧の中君を白宮のむかし給ふとて云典し給ふの
んをとらせたる絹やさし給てとハ白宮のさまをと
ていとおもしきやとや
ゆく文をとえくなりゆ給ふにおぼされ事世ふ給ふさしていそぎ
給へるを　白宮よりも六条へあらせらるゝことや
のほえんも人にし人かる人々かれをかわかうちにさせなり
給ふ　弄　六条のきさきありてやうて白宮へむかし給ひんと
夕霧の御ま人給しの中君ふをきえて思ひとゝめかりぬと
て志のかひの人給ひんとゝ人かくるしとやらと

たゞしゆかりにめづらしきたぐひともこゝの中納言などすぐれ人
まゆつくろひのくちつきに　夕霧のみや薫とならぶ君
の心たまさかにめでたり
さるやうありてましや　薫とよ紀の舞まであさんなれ
しなどとて夕霧の舞まやかして御もとにひ給や薫の
年ごめには大君いかなる人
年比人しき御物などひさん人もなくなして物ごとの月を　夕霧の
色なるめでたきふたる紙あとおほしけるにて
んぞや大君のうるさとこそ薫の君やうよはやと給や
ちる人さ人しこめこしなどしさ給ふれと　夕霧よると
薫の人すなたまりして大君のうるさを夕しなさる給ふ
世のまう物さへめぐちくたゞしたいとふかきもゆかしく
おぼしまはゞかもくさやう此身ほいは物さくなんとおさ

まじきをあひよしと申給ふ　薫夕霧人の夜ばなしや大君
のかせ給ふゝふかれば我もさらにしるくしるとやされの
さやうなるはいとさましきの給よしとほひの中や
いろそは君さ人おほゆるくことも思ふ事なと物くるまで君は
あやふきやを思ひ給ふれと　夕霧のものや　白きめもうけ
ひさ給ふなりし文薫さ人とのかはや
おほかく　夕霧もんやおもかくといふ様んころふと
云心や薫と舞まどる人さよしの給へともうけひかぬ
るすとおほさばや
志うしあはれなりしひとかくも人さ夜のいと思ふやうし事り
物しける人も志めても世のこゝろし給ふはうけのさもれさうる
の花
夜とも　夕霧と薫兄弟のうるさや薫とまうしおぼさ

二条院の桜を見やり給ふに　薫の心やり給也
ぬしなき宿やと先まつおもひやられ給へるも心くるしやなとひとり
つまこち給ふまゝて　薫の心也二条院を見やり給てさて
宇治の宮のことを思ひ出給也さてこそぬしなき宿とも也
拾遺恵慶
浅茅原ぬしなき宿の桜花心やすくや風にちるらん
花
と案下此詞の心やすくや成るとあり恵慶法師の哥にて
叶へりぬしなき宿ハ宇治の古宮なといふ也と
宮此比も世に来り給へり　二条院へ薫の来給ふ也
こゝうちにおりしまふつきていとようもてなし給ふもれハ
めやすのわさやと見えまる頃なり　薫の心也匂宮二条
院うちにいらせ給ふ也
きいのゆふそやおほゆるんの心ひそまる程におやしきや
薫の心也中君をも匂宮へありけるをおもふるけと後悔の心也

されとも心のうちハいと哀にしろやむもくそとひそかに給
ひあるなにくれと御物かたりしやうしく給ふつく夕つけて宮
もうち入来り給ひんとて御車ひきよせてしてんくおほ
ゑ来りあつまりまいるなととも出給　薫の心也後悔なる
こと思ひ給ふ中君此有つさ給と心やすからぬ也
まちゐて給ふなれの御かた人来り給へり山里の御有さま
よくいはの事ともむつかしき事なとも聞えさせ給らん
のすゝみのけはひのみ有らして　薫西対中君の方へ渡り
給也
御せうそこ申させ給へ里にて出させ給ひて　こゝろへ
して薫の来給をいひ給也
むかしの心ちせらる人々なへしいかて御もてなしも
せさせ給ふ人を宇治より出て薫の心ちさせ給ふも也これか

出きて薫をあひ見てんとくやしさふかゝるも
何さゆゑの色にても見つましうといひ給ひて又縁なからそ
かゝるやとなくてまうしきこえんもあさくあれくしきとゆめ
やと深く思ひ給ひに　薫の御事をかへる月ゆるよ
又るとなきん八たれくしとやしに白かめもとゆめ給て
八中くうつしうんとつくる給とも
世中かゝるたゝかゝにさらのとそし給ふや御まへの本意も
薫の御事とハなお宇治ふくれやうめも中君へ意まも
くあつひ給ふ道を世中かゝるたゝやうよお御ゆかりやも
みすし思ふそて高九ん給るに　哥　薫乃心よ詠と思ふて
給ととふ心得きく
夜あるまにかけくも給るか雅と嘆てうらみあめて袖し
給ふくなはぬるし夢なる紙　宇治乃するなどといひ出給也

きにかたもまかりん　中君の心も薫よりおとなしく大君の
とくとおもひしまゝにもとりと見へも
かくのかゝむをゆかんくるをかくしに花のことをりもよりもと
知りよはきをもきをしんゆきそてすくしつ思ひのさ南り世代
あともおほしいつるには色をる合へ　宇治つるも中君かり
給く花の色をも見えともかりよ高をたくをかとをなく
さめん梅をとも中君の心も　私云大君なけしぬく
薫よりうちそひ給へるはそミ中君心のそ花お
色も見え色をつきあも高くさまにん梅とも
むさ高くにあしくまかもいへりしもおもひの心はそさようと
ゆきもなりくられしおきて紀いとくまさかと常り
中君の心を宇治よりの御そく高る南給し付よる色も今
二条院よりうけしまして大君乃つかるをといひ出給へい

とかくし給ひもまからせ給ふとや
人くとよのはしまうらくしうとなりて参りしすし給ひて
所々の御たいめんの折ふしなとも　女房なとも薫とはいふらく
しうとまてなし給ひそとて中宮を薄雲やうや
つましもて我も見参りまゐらせ給ふさまとも見えしなり
世給へるゝれなとも中宮のとも　と白宮ゆもへられ給
てゐつめしつる時そ薫のおほえよおつくひ給ひさし
ともに熱術し給ひなとくくとうゐ中宮也
人侍らしもこ宮とはしいそ御めくへとれ給ふ侍くまゝなる
とやもしひ給ふほとに宮いそ給はんとて　中宮の
越前ともしの御まへ薫よの給はまれともつま
しさにやもしひ給とや
御まくらとやにほさらし給へりとさうしよ心ものはくろひ

あさくし給ひく　白宮禁中へ参り給はんとて御
心ことさらひや給ひんとて中宮にもへとも給ひ也
見るもひ給ふ御さまいと中納言てはことなとかりなる
と見給ふく
あとくしもとにけしかはらそてはいつしもと給ふ
　白宮の方へと薫の此地より
白宮の御方も行とて薫とはやしく給ひしとあらそてあ
まさ給ひそとや
御あらさまはあまり行やしとこまてうしつやとそうり
し給ふまし
　白宮の御方も中宮よ御対してはゐまると
さとくあつかひとこ給ひ薫なるへきなる給とや
あたゐはおとうゐしなとともやと御ほゆきとさへり
むまたにつそて御ほうんはゆとさてそうきちつやうそく
むく抱くりもうちつくひ給へりしるとやうし給ひ給り

哀

白氏の為にも葉のさのこと中書にちくつる給

ちんハかくやさハさひあつしさ給ひかくてさて紆あるとの

白氏の詞也

さきあつとてもいまうんゆるひせんとも又つくにそやうさう

りしおもてこのんはそ心やとうちつるしの給へも

白氏の詞也さつひくもいまうに葉は沙汰して是

うたかひしきの心得よしと中書はの給ひやんゆるを

よもへし

ひとつとおしもとまつくうしつれと　中書の心也白氏の

葉とうくに校まの給ふて侍しちあさんとさすくり

あれさ一つさあしはまつくうしきとも

わつ法あるもはかり道もくさのしられあしくへのほけんつとに

と給ふつあつくふるあしねも　中書の心也葉の心

し八分ともわつうそ侯さひ給ふあるとも

彼人ともさり此給めるやうにいあし人の侍つるをもちて候も女

えそつつ思ひまうあるとしも見てしなるゆしと侍りそやと

そ給はせと

中書の心也葉のつ給へしは紙をも大君の

うつりとさへとの給ひやうに中書ともいあし人のたへ書の世も

あにあまし人あめ侍も又しもとも我思ひし每と葉うり

見えしきもれとも

さもとくにそやうやとかさくるやまとりし給ひのくろし給へも

くれしうおほさきかり　白氏の葉をとうさうやうに

とくの給ともやまとりしほんくるしう中書此をひ給とある